

## 第14回 令和7年5月2日（金）

「飼い犬に手をかまれるということ。」



私には溺愛している2匹の犬がいて、朝夕の散歩を欠かさず、犬たちも私に一番なついています。でもたまに私のYシャツのボタンに噛みついていたいするので、それを取り上げようすると、「ウー」と怒って手に噛みつきます。「こんなに面倒見ているのに！」と頭にくることがあります。

さて、これがまさに文字どおり「飼い犬に手を噛まれる」ということ。怒るわ、悲しくなるわ、落胆することはなはだしいという気分です。

でも冷静になって犬の気持ちになると「宝物を取られる」わけですから、怒るのは当然ですよね。

ましてや犬を飼ったのは人間の勝手で、人間が仕事の時は1日中ゲージの中で待って、外に行くときも綱を付けられていきたいところにも行けない。「そりゃYシャツのボタンぐらい噛みたくなりますよ」と思っているかもしれません。

人間というのは相手に期待したり、信頼したりすることができます。そしてそれを裏切られると怒りや悲しみがわいてきます。

その相手が「期待してほしい」とか「信頼してください」と頼んだわけではなく、こちらが勝手に期待や信頼を寄せることが結構あるのではないかでしょうか。もしかしたら怒られたほうは「別に期待してほしいと思っていないし」ということもあるかもしれません。

社会に出たら期待する前に「信任」する。これは「信じて任せる。」ということ。そして任せた以上は失敗したら任せたほうが責任を取ります。

最初は失敗するのは当たり前。「信任」を繰り返して、そこではじめて「信頼」＝「信じて頼る」にとどりつくのだと思います。

飼い犬に手をかまれて怒るのは人間のエゴかもしれません。「普段ストレスためさせちゃってごめんね」と謝るべきなのかも。

そう思って今日も犬たちを甘やかそうと思います。